

# 幼児の社会心理



## (一) コミュニケーションと直接的体験

幼児は外界からいろいろなことを学ぶことによって、その精神を発達させます。幼児の心の中に、外から知識が入って来るのに、二つの通路があります。一つの通路は、他の人の話を聞く、本を読むなどのコミュニケーションです。もう一つの通路は、直接に、事物を見る・聞く・触れるなどの直接的体験です。たとえば、「ストーリーに触れると、やけどをする」ということを、他の人の話を聞いて学ぶのは、コミュニケーションを通して知識が入ってくる場合です。また、実際に、ストーリーに触れてやけどをした場合にも「ストーリーに触れると、やけどをする」ということを学ぶことになりま

す。これは、直接的体験を通して知識が入ってくる場合です。この二つの通路のいずれがとぎされても、知識の吸収が遅れるこ

とになります。たとえば、同じ話を聞いても、ことばを少ししか理解できない子どもは、たくさんのことばを理解できる子どもよりも、少しのことしか学べないでしょう。他の子どもに接触する機会（直接的体験）の少ない子どもは、子どもどうしの交り方について学ぶことが少ないでしょう。

幼児教育においては、外から知識の入ってくるこれら二つの通路を開発することが大切です。また、幼児自身もこのような通路を開拓することに興味をもっています。ものの名前を知りたがったり、人から聞いたことばを自分でも使ってみたがるのなどは、コミュニケーションへの強い興味の現われです。いろいろなものを見たり、聞いたり、触れたりしたがるのは、直接的体験による知識の獲得をめざしていると解釈できるでしょう。

また、幼児は外から学んだことを、口に出して反復したり、実際

水 原 泰 介

に行動して試みてみたりして、それを確かめることが多いのです。

あることばを知ると何度も何度もそれを使ってみます。砂場で何か（たとえば、トンネル）を作ることを学ぶと、それを作ることを繰り返します。どうしてこんなに何度も何度も同じことを繰り返すのでしょうか。このような質問に対して、多くの人は、「子どもは、それがおもしろいから何度も繰り返すのです」と答えるでしょう。

ではなぜこういうことが子どもにとっておもしろいのでしょうか。好奇心とか、探求心とか呼ばれるものについての最近の研究によりますと、人は、自分が十分に知っていることには興味をもちません。また、全然知らないことにも興味を感じません。ある程度は見当がつくが、未だわからない部分が残っているようなものに対して興味がわくのです。

あることばを、はじめて幼児が知った場合のことを考えてみますと、幼児には、ある程度はこのことばの意見がわかるのですが、未だ何となくはつきりしない点が残っています。このようなことばをいろいろと試みてみるのは、探険でもするような興味で湧くのです。

ある子どもが火事を見ました。その後、その子どもは火事の絵を何度もかきました。この子どもは、火事の絵をかくことによって、火事を見た時の印象や感情をもう一度体験しているのです。そして、その体験を確かめようとしているのです。このような対象についての印象や感情は、それを体験する子ども自身にとって、何か不可思議なもの、したがって探求心をそそるようなものを含んでいる

のです。

幼児は、ある時期に、危険なことをやたらに体験したがる場合があります。たとえば、積み木を積み重ねて、その上に立ちあがってみたり、丸太の上を歩いてみたりします。それを何度も繰り返すのです。こうして、幼児は、このような場合に体験する感情を探求しているのです。

このように、幼児は、外からの知識を受動的に吸収するだけでなしに、子ども自身が自発的・積極的に外界にはたらきかけて、知識や体験を確かめるということをしています。もし、周囲の人々が、子どものこのような自発性・積極性をおさえると、子どもにとって、知識や体験が確かめられないままにとどまり、子どもの安定感が失われます。

幼児の関心を最も強くひきつけるものの一つは、同年輩の子どもたちです。そして、幼児は、周囲の子どもにはたらきかけ、相手がどういうものであるかを確かめようとします。ところで、もし周囲の人たちの圧力によって、幼児の自発性・積極性がおさえられ、幼児の安定感がそこなわれると、幼児は、周囲の子どもたちに、安心してはたらきかけることができなくなり、彼らといっしょに行動することにしりごみするようになります。

幼稚園の中で、幼児たちに最も大きな影響を与えているのは先生です。したがって、先生が園児たちの自発性・積極性をおさえるか、あるいは、これを伸ばしてやるかは非常に重要な問題です。ある研

究で、東京都内の三つの幼稚園の先生の園児に対する言動が調べられました。この研究では、先生の行動のうちで、次の二種類のものの出現頻度を数えました。その一つは、「先生の考えを子どもにおしつける」「子どもの主張を拒絶する」「子どもを非難する」「おどかす」「無視する」などで、このような型の行動を支配的行動と呼びます。もう一つの型の行動は、「子どもの自発的行動を伸ばすように助けはげます」「自発的行動を受け入れる」「ヒントを与える」などで、これを統合的行動と呼びます。支配的行動は、先生の意図している通りに子どもたちを動かしてゆこうとするやり方で、子ども自身の希望や意図にはあまり考慮がはられません。統合的行動は、子どもが、欲し、意図していることを生かすことのできる道を開いてやり、あるいは、子どもが自発的に選択するようにしむけるというやり方です。

支配的行動の多い先生のクラスでは、子どもたちは、周囲に向かって、自発的・積極的にはたらかけることが少なくなります。たとえば、子どもたちは、安んじて周囲の子どもたちにはたらかけることができなくなり、いっしょに行動することが少なくなるでしょう。したがって、このようなクラスでは、統合的なクラスに較べて、グループ遊びが少なくなる傾向が見られるでしょう。

この研究で調べた三人の先生の、支配的行動の統合的行動に対する割合は第一表のようになっていきます。O幼稚園の先生の場合には、統合的行動100回に対して支配的行動61回の割合であるのに、Kなら

第一表

幼稚園	支配 統合	グループ遊び		独り遊び	
		長時間	短時間	長時間	短時間
O	0.61	36	5	10	6
K	1.27	13	4	19	26
G	1.25	18	22	13	25

びにG幼稚園の先生の場合には、統合的行動100回に対して支配的行動がそれぞれ127回と125回の割合になっていきます。つまり、KおよびG幼稚園の先生は、支配的行動の回数が統合的行動の回数をかなり上まわっています。

これらのクラスでの子どもたちのグループ遊び・独り遊びの回数が第一表に示されています。これによりまずと、O幼稚園では、比較的長く続いたグループ遊びが36回見られたのに、KおよびG幼稚園では、それぞれ13回と18回見られたに過ぎません。また、独り遊びは、KおよびG幼稚園でたくさん見られました。

## (二) 態度や行動の変化

次に、コミュニケーションや直接的体験によって、人や物などに対する好悪が形成されたり、変化したりすることについて述べます。たとえば、母親が、近所の知能の遅れている子どもを「あの子はバカだ」と軽蔑しているのを聞くと、子どもも、その知能の低い子を軽蔑するようになります。このように、コミュニケーションや直接的体験を通じて、人や物に対する子どもの態度は、周囲の人か

その対象（人や物）に対してもっている態度に似てきます。もつとも、このように子どもの態度に影響を与えるのは、周囲の人々のうちで、その子どもから好かれていいる人々だけだ。また、架空の人物でも、子どもから好かれていれば、やはり実在の人物と同様の影響を子どもに与える場合があります。子どもが嫌っている食物、たとえば、にんじんを子どもに食べさせるようにさせた研究があります。この研究では、子どもに物語りを話して聞かせます。その物語りの中にでてくる中心人物（子どもに人気のある人物）は、にんじんが大好きで、いつも喜んで食べています。この物語りを聞くと、かなり多くの子どもがにんじんを食べるようになりました。

子どもたちは、自分が好いている母親・先生・友だちなどが好んでいるものを好むようになり、これらの人々が嫌っているものを嫌うようになるのですから、人や物に対する子どもの好悪を変えさせるには、これらの人々のその対象に対する好悪を変えてもらうことが大切です。たとえば、子どもに、知能の遅れている子どもを軽蔑することを止めさせようとしても、親たちが知能の遅れた子どもを軽蔑していたのでは、子どもにだけ態度を変えさせることは難しいでしょう。

このように、周囲の人々や架空の人物の態度や行動を学ばせるといふやり方の他に、賞や罰で子どもを動かして、新しい態度や行動をとらせるやり方があります。たとえば、ほうれん草の嫌いな子どもが「もし、このほうれん草を食べたら、ごほうびをあげる」と聞か

されて、そのほうれん草を食べると、その後はごほうびなしでもほうれん草が好きになる傾向が見られます。ところで、この場合、ごほうびが多い方が、少ないのよりは効果があがるでしょうか。最近の研究によりますと、ごほうびが少ない場合の方が多い場合よりも、ほうれん草が好きになる子どもが多いという結果が示されています。またごほうびを与えるのではなくて、「もし、このほうれん草を食べなかったら、今度の日曜日には、どこにも連れて行ってあげませんよ」というように、子どもをおどして（罰を予告して）新しい行動をとらせるやり方も用いられています。このやり方においても、子どもをあまりおどさない場合の方が、強くおどす場合よりも、ほうれん草を食べる子どもが多くなっています。これに類似したものとして、子どもがある行動をとった時、その行動を非難して、その行動が好ましくない行動であることに気づかせ、以後その行動をしなくなるようにさせようとするやり方があります。研究の結果によりますと、この場合にも、強く非難されればされるほど「自分のとった行動は悪くない」と考えるようになる傾向があります。つまり、強く非難すると効きめがないのです。一般的に言って、子どもがこれまでにとっていた行動を止めさせて、別の新しい行動を好きにならせるために、子どもを勧誘したり強制したりする場合には、賞や罰はできるだけ少ない方が効果が上るようです（名古屋大学）